

白布祭壇



コロナ禍を経て葬儀のあり方も大きく変わってきている。葬儀の小規模化、簡略化が進行し、火葬だけで儀礼を行わない直葬なども選択肢の一つとして一般に認知されるようになった。こうした変化はコロナ禍が原因というよりも、それ以前から生じていたものがコロナ禍によって一気に顕在化したと考えられる。

直葬をのぞけば、葬儀においては祭壇を飾ることが今でも当たり前になっている。現在は花を基本とした生花祭壇が飾られることも多いが、それ以前には白木彫刻祭壇が全国的に浸透していた。

葬儀祭壇は、そこに棺や位牌、遺影を安置し、人々がその前に集まって通夜から葬儀式といった一連の儀礼を行う最も中心的な存在である。そして従来は、祭壇の規模が葬儀の規模に連関し、葬儀費用の基準となっただけでなく、故人の社会的地位の表象の場にもなっていたのである。

現在のような葬儀祭壇の使用はそれほど古いものではなく、大正末期から昭和初期にかけて都市部を中心に自宅告別式が浸透していくようになってからである。それ以前は自宅で通夜を行い、翌朝出棺して、葬列を組んで寺院や墓地へ向かい、そこで引導を含む葬儀式を行った。東京や大阪などの大都市で葬列が行われたのはおもに大正期までで、当時の飾りは自宅の枕飾りが豪華になった程度で、また寺院では輿の前に葬具や供物を並べる程度であった。

しかし、交通の発達や市域の拡大、意識の変化などにより葬列が廃止されると、その代替として告別式が浸透し、さらに自宅で告別式を行うようになると、自宅飾りとして、祭壇が使用されるようになった。ここで取り上げる白布祭壇が当時使用された形態である。

白布を掛けて段を作り、棺前に組み立て、上段中央の宮殿くわでんに位牌を収める。下段には自宅枕飾りに使っていた枕行灯や香炉、燭台を配する一方、中段には蠟燭を六本並べた六灯がある。これは仏教上の六道を表し、寺院や墓地で使用されていたものである。すなわち、自宅での葬具と寺院や墓地の葬具を一体化させたものがこの白布祭壇であり、昭和戦前期から高度経済成長期までおもに使用されていた。そして白布部分の段を白木に彫刻を施し段にしたものが白木彫刻祭壇である。

つまり戦後全国に告別式形態の葬儀が広まっていくにつれ、白布祭壇、後に白木彫刻祭壇が浸透していったのである。いくなればこの白布祭壇は、葬列から告別式へと葬儀の変遷を物語る重要な資料なのである。